

G・S・シェファード著 井上照丸訳

『農産物の流通—経済分析—』

速水佑次郎

G・S・シェファードの名はすでに我が国農業経済学者間に『*Agricultural Price Analysis*, 3 ed., 1951 (農林省農業総合研究所訳『農産物価格分析論』) および『*Agricultural Price and Income Policy*, 3 ed., 1952 (川野重任監修『農産物価格政策と所得政策』) の紹介を通じて親しいであろう。今度井上照丸氏 (1914-)『*Marketing Farm Products—Economic Analysis—*』 3 ed., 1954 が『農産物の流通—経済分析—』の標題のもとに訳出され、ここにシェファードの三部作のすべてを日本語で学ぶことが可能となったわけである。

本書はその標題の示す如く農産物の流通過程を経済学的に分析したものである。農産物の流通過程はそれ自体独立した研究

対象をなすが、シェファードのこの著作は他の二作、特に『農産物価格分析論』と内容的に有機的関連を持ち、それが又この著作の類書とわかつ特徴となっている。『農産物価格分析論』はマーシャル的需要、供給の部分均衡理論を分析の基礎概念として米国に於ける農産物の価格決定メカニズムを理解せんとしたものであるに對し、『農産物の流通—経済分析—』は農産物の需要と供給とを現実均衡へ到達せしめる流通活動、及びその活動の場たる市場の構造を分析せんとしたものである。シェファードにあつては価格決定メカニズムの分析にあたつて、需要、供給の均衡化をもたらす流通活動の理解が前提となつており、一方流通分析にあたつては農産物の流れの方向と大いさを決定する需要、供給の均衡化と云う理論概念が分析の枠として与えられている。

さて著者が農産物流通分析の枠として需要、供給均衡による価格決定と云う理論を有したことは本書第一部において明らかである。ここに於て著者は農産物流通の基本的問題点として、「一、需要の変化をたえず把握すること、二、消費者の需要を生産者に反映させること、三、最低費用で品物を生産者から消費者に移すこと」(九、一四、一六頁)の三点を挙げているが、この問題のとりえ方は流通を需要、供給均衡の調節者であるとする考え方からの自然な帰結であると云えよう。即ち需要の動

向の把握は需要に見合う供給を実現するための第一歩として生産者のみならず、加工、輸送等の流通業者に要求される知識であり、実現された供給と需要のギャップを価格体系を通じて生産者に伝え、生産を調節させる過程は需要、供給均衡の基本條件である。更に流通を需要、供給の調節者と見た場合、その機能をはたすにあたって最も能率的に、換言すれば最低費用で農産物が流通されているか否かが問題となる。

このように価格決定に関する需要、供給の均衡理論を枠として流通の問題点を設定した後、著者は完全市場と云う概念を流通の分析基準として提出する。ここで完全市場とは空間、時間及び商品の形態を通じて齊一価格（輸送、貯蔵、加工の純費用を割引きした場合）の支配する市場である。完全市場はそのなかの「すべての買手と売手が、需要、供給及び価格について完全な知識をもち、その知識に基づいて合理的に行動する」（二、三頁）結果生ずるものであって、当然この市場に於ては、(一)、需要の変化はたえず把握され、(二)、消費者の需要は生産者に正しく反映され、(三)、品物は最低費用で生産者より消費者に移されている筈である。即ち、完全市場は現実の農産物の三つの問題点をその乖離において計る基準となるものである。

以上設定された流通の三問題点は第二部に於てそれぞれ米國に於ける農産物流通の実態と対比し、完全市場からの乖離とし

て分析されている。三章より八章迄は第一の問題点、九章より十七章迄は第二の問題点、十八章より二十一章迄は第三の問題点が現実の諸事例を基にして分析されている。更に第三部に於ては第一部に於て提出され、第二部に於て展開された流通分析の方法が個別農産物のそれぞれについて総合的に適用されている。以上農産物の流通と云う錯綜した現実現象が流通とは需要、供給の均衡を実現する場であり、流通の基本的機能とは需要、供給を均衡せしめることにあると云う認識を理論的な枠として統一的に分析された。

もとより本書を価値あらしめているものは理論の枠組自体ではなく、米國に於ける農産物流通の具体的分析過程、即ち農産物流通の各局面について現実に問題点を摘出し、その問題について仮説を設定、検証し立証された仮説にもとづいて問題解決の方途を示すと云う過程にある。読者は本書に引かれた数多くの具体的分析例を通じて我が國の流通問題を分析するにあたっての良き示唆を得ることが出来よう。全編にわたっての分析例の多様さ、豊富さは農務省、州立農科大学等の機関に於て多年蓄積されて来た米國に於ける農産物流通分析の厚さを物語っている。

近年農産物、特に食糧農産物の流通の高度化を背景に米國農業経済界に於ける流通問題への関心の高まりは著るしく、仕事

の量に於て、又専攻する学徒の数に於て流通分析は伝統的に農業経済学を中心であつた経営分析をしのご勢いである。しかし農産物流通の全域にわたつて統一的に取扱つた書は数多くはなく、経済分析と呼ぶにふさわしい理論的骨格を有した著作として、本書は唯一のものであらう。次第に政府統制と云う防堤を失ない、商業的流通過程の波にあらわれつつある我が国農業にとって経済の論理にもとづく流通過程の分析が痛感される。かかる時にあつて本書の翻譯は意義深いものと云えよう。訳文は平明であり、特に米國農業特有の技術用語の訳出に苦心のあとがうかがえ、訳者の労を多としたい。原著の紹介をよき刺激として我が国農産物流通についての分析が積み重ねられ、その蓄積の上に我が国学徒の手による農産物流通分析の書が現われることを切望する。